

霞

—2016年度冬季展示室だより—

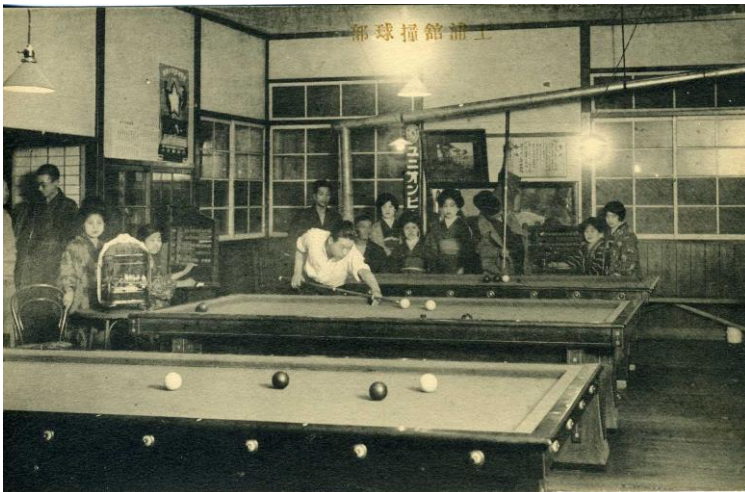
土浦市立博物館

平成29年1月5日発行(通巻第37号)

当館では「霞ヶ浦に育まれた人々の暮らし」を総合テーマに、春(5~6月)・夏(7~9月)・秋(10~12月)・冬(1~3月)と季節ごとに展示替えを行っております。本誌「霞(かすみ)」は、折々の資料の見どころを紹介するものです。展覧会や講座のお知らせ、市史編さん事業や博物館内で活動をしている研究会・同好会などの情報もお伝えします。

古写真・絵葉書にみる土浦(37)

絵葉書「土浦館撞球部」



昭和8(1933)年頃の川口川沿いにあった旅館土浦館の撞球部です。木造3階建ての本館とは別棟に、洋食部と撞球部がありました。電灯を灯した室内には、和装の男性や女性が顔をそろえ、洋装の男性二人がキュー(突き棒)を構え、ビリヤードに興じています。水平に横切るストーブの煙突やテーブルにおかれた鳥かごもみられます。

目次

○古写真・絵葉書にみる土浦(37)	1
○博物館からのお知らせ	1
○古代の僧具(古代)	2
○「志々塚」と記した鎌倉時代の手紙 (中世)	3
○町人の情報収集(近世)	4
○土浦館と松庄旅館(近代)	5
○市史編さんだより	6
○地域と博物館	7
○霞短信「旧中城町の山車人形と謎の記録 紙」	8
○コラム(37)	8
○情報ライブラリー更新状況	8

【情報ライブラリー検索キーワード「川口川」】

博物館からのお知らせ

★★館長講座(茂木雅博館長)★★

1月22日(日)、2月19日(日) 各日とも14:00~(1時間30分程度)

テーマ:「常陸における古代の織物」 会場:博物館視聴覚ホール

★★参考展示「昔のくらしの道具」★★

1月5日(木)~2月17日(金)

小学3年生の校外学習に合わせ、昔の人が使ったくらしの道具を紹介します。

★★どんど焼き★★

会場:桜川河川敷(学園大橋下)

1月14日(土) 午前11時点火 受付は午前9時~11時半

正月飾りを燃やし1年間の無病息災を祈ります。先着200名にお餅を配布します。

★★はたおり作品展★★

2月18日(土)~2月26日(日) ※詳細はホームページをご覧ください。

はたごしらえ講座受講生とはたおり伝承グループ「綿の実」による作品展です。はたおり体験もできます。

★★第38回特別展「土浦八景—よみがえる情景へのまなざし」★★

3月18日(土)~5月7日(日) ※関連イベントの詳細はお問い合わせください。

- ①3月26日(日)・4月9日(日)・5月3日(水) 展示解説会「八景をめぐる旅」 午後2時~3時
- ②4月8日(土) 史跡めぐり「土浦城ウォッチング—土浦八景ゆかりの人々」 午前9時~正午
- ③4月15日(土) 記念講演会 午後1時半~3時
- ④4月23日(日) 連携講座 午後1時~4時(予定)

★休館のお知らせ★

- ・毎週月曜日(但し1月9日、3月20日を除く)
- ・1月10日(火)
- ・2月14日(火)
- ・3月21日(火)

★祝日開館します★

- ・1月9日(月) 成人の日
- ・2月11日(土) 建国記念の日
- ・3月20日(月) 春分の日

★特別展準備のため無料開館します★

- ・3月11日(土)~12日(日) 展示室1・東櫓
- ・3月14日(火)~17日(金) 東櫓のみ

博物館マスコット
亀城かめくん



※お知らせ欄の行事・日程は、一部変更となる場合があります。

てっぱつがた 古代の僧具・鉄鉢形土器

吐く息が白くなる冬のある日、まちかどで僧が托鉢をする姿をみたことがあります。編み笠を深くかぶり、黒い僧衣を身に着け、手には小さな鉢と鈴を持っていました（写真左）。

古来、鉢は僧にとって必須で最低限の道具とされ、「三衣一鉢」という言葉があるほどです。質素な生活を旨とする当初の仏教思想を良く示しています。僧が守るべき規律では、鉄鉢や瓦鉢（焼き物の鉢）以外は用いてはならないとされていました。鉢は托鉢で人々から喜捨を受ける容器であり、自らの日常食器としても使用されました。仏教儀礼が盛んに行われるようになると、仏前の供養具としても利用されました。

僧が手にした鉢にちなんで、「鉄鉢形」と形容される土器が市内の古代遺跡で見つっています。この土器は口が大きく開き、肩が張り、内すぼまりで底が丸い独特なものです。その形は、金属製の鉢の中でも鉄鉢が典型とされていることから、鉄鉢形土器と呼ばれています。

市内では、奈良時代（8世紀）から平安時代（9世紀）までのいくつかの遺跡で鉄鉢形土器が出土しています。物資集散の中核的な役割を担う集落である石橋北遺跡（おおつ野）では、全体の形が分かるもの（写真右）がみつかりました。須恵器と呼ばれる土器で、大きさは口径が18cm・高さ13cmのもので、肩の部分が大きく張り、薄く丁寧につくられています。底が丸いので手の平で持つか、筒状の台の上に乗せたものと思われます。粘土には雲母が含まれ、新治地区周辺の窯跡で製作されたものと考えられます。

このほかに、鉄鉢形土器の性格を考えるうえで重要な遺跡として、寺畑遺跡（おおつ野）や根鹿北遺跡（今泉）などがあります。寺畑遺跡では仏堂建物を中心に集落形成がなされ、寺名「千手寺」や僧名「案豊」の墨書土器とともに、鉄鉢形の土師器や二彩陶器も出土しています。根鹿北遺跡は土器生産にかかわる遺跡と考えられ、瓦塔を安置する仏堂建物が造られました。根鹿北遺跡で出土した鉄鉢形土器は金属器を意識したつくりで光沢があり、「佛」と墨書がされていることから供養具であったと考えられます。

これらの市内遺跡出土の鉄鉢形土器をとおして、地域の多様な場で活動をする僧の姿がうかがえます。

（関口満）



冬の托鉢（写真協力：総持寺）



石橋北遺跡出土の鉄鉢形土器（当館所蔵）

1/21（土）11時・14時からこのページで紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください（いずれも古代コーナーに展示）

- 根鹿北遺跡出土の鉄鉢形土器（当館所蔵）
- 寺畑遺跡出土の鉄鉢形陶器（当館所蔵）



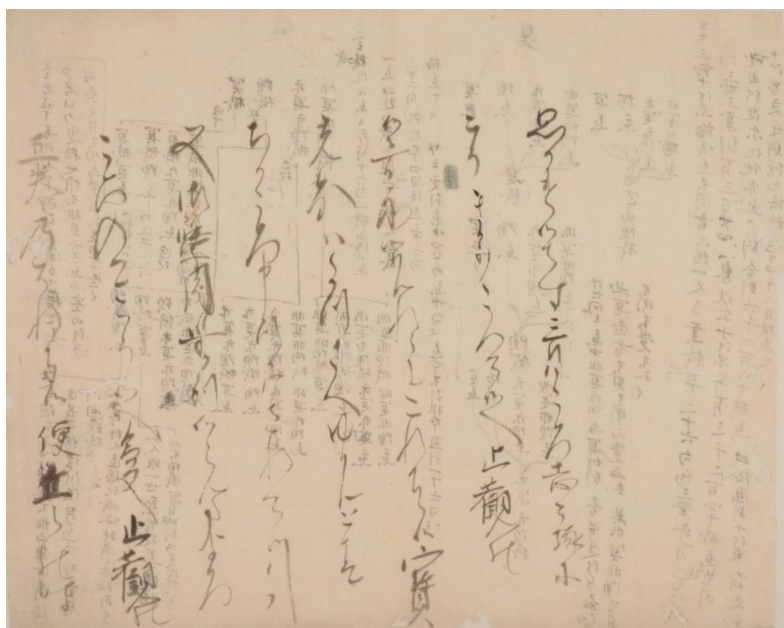


「志々塚」と記した鎌倉時代の手紙

誰が書いたかわからないため、「氏名未詳書状」あるいは「某書状」と呼ばれている手紙です。原資料は神奈川県横浜市の称名寺が所蔵するもので、神奈川県立金沢文庫に保管されています。実に4000通を超える金沢文庫文書の一つで、平成28年、国宝に指定されました。当館では、鎌倉時代の土浦を語るうえで欠かすことができない資料であることから、平成19年のリニューアルオープンに際して複製を制作しました。

手紙には、書き手の名ばかりでなく、宛先や年月日も書かれていません。しかし、よくみると手紙の本文とは別にやや小ぶりの文字がうっすらと映っています。文字が反転しているため、この手紙の裏面に何か書かれていることがわかります。手紙を受け取った人物が再利用したもので、ここから手紙の宛先や時期を推定することができます。裏面は、審海という僧侶が『大乘仏教起信論』という仏教書の書写に利用しています。審海は、東国に律宗を伝えた忍性の推挙で文永4（1267）年に称名寺に入った僧です。この手紙は、審海に宛てて出されたものとみてよいでしょう。

手紙は、「思いがけ候はず三月ころ、志々塚にこそまかり候はんとて候へ」と始まります。「志々塚」とは現在の土浦市穴塚のことで、具体的には般若寺を指します。手紙には「宝光房」という僧の名前も見えます。審海に近い宝光房了禅のことで、手紙は般若寺に了禅を伴ってでかける旨を審海に求めています。手紙を書いた人は般若寺に縁のある僧侶でしょう。了禅は弘安5（1282）年には既に亡くなっているため、審海が称名寺に入って間もない時期の手紙と推測されています（神奈川県立金沢文庫テーマ展図録『紙背文書の世界』1994年）。



下野薬師寺（栃木県下野市）にいた審海を称名寺の住持に推挙したのは忍性ですが、般若寺を常陸における律宗の重要拠点としたのも忍性でした。建長5（1253）年、忍性は般若寺で結界を行ない、寺容は大きく整備されていきます。それに伴い、律僧が鎌倉と土浦を往き来するようになったことをこの手紙は伝えています。（堀部猛）

氏名未詳書状（国宝 複製）

原資料：称名寺所蔵 神奈川県立金沢文庫保管

2/11（土）11時・14時からこのページで紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください（いずれも中世コーナーに展示）

- 結界石（般若寺所蔵、当館寄託）
- 雑談集（当館所蔵）



町人の情報収集

いろかわみなかのなかのしみず
—色川三中著「野中廻清水」—

土浦に生まれ育った色川三中（1801～55）は、薬種の製造販売や醤油醸造を営み、晩年は国学研究にいそしみました。博物館では膨大な日記「家事志（次第美年執筆分は「家事記）」」26巻31年分を翻刻して全6巻にまとめたのに続き、平成29年3月、三中の雑記兼随筆「野中廻清水」を刊行いたします。

本書は8巻のうち5巻4冊が残っており、290件の記事は内容が16項に分類できます。家業であった本草や薬方、研究対象の国史や考古に関する項目が4割近くを占め、古語や語源、和歌、地理、風俗、災害や外国船の来航などが細かい癖のある字で記されています。短い記事は50字ほどで、自身の随想を綴った長い記事は2000字を超えます。また、8割以上に典拠や手紙の差出人など、情報源が明記されているのは三中の学者としての側面をよく現しています。

しかし、神木を伐ってたたりをうけた、神罰をうけて稲穂が出なかったなど、迷信や縁起を担いだ記事も多く、薬種や医学に明るい三中がなぜこのようなことを書くのか不思議です。近世人の頭脳には科学と非科学が共存していたのです。

“野中の清水”とはこんこんと湧く泉を意味します。三中が関心や興味の赴くままに記した「野中廻清水」は、その名の通り着想やひらめきの源泉でした。嘉永6（1853）年6月3日、ペリーがアメリカ軍艦4艘を率いて浦賀に来航したのち、刻々ともたらされる黒船情報や社会の変容を三中は「野中廻清水」に綴っていきましました。黒船関係で「野中廻清水」の厚みが増すと、それを別冊に仕立て、「片葉雑記」と名付けました。風説留「片葉雑記」6巻、黒船関連の外交文書や巻説を書き写した「草乃片葉」34巻、江戸の国学者らからの書状1100通余りを貼り込んだ「来翰集」23帖がまとめられました。幕府が外交情報の民間への流出を危惧し統制を強めるさなか、三中は土浦にしながら多くの情報を集めました。

そもそも三中は10代半ばから「記録しておくこと」を自らに課し、家族や奉公人にもそれを要請していました。記録を読み返すことで、社会の変化を冷静に見つめ、惑乱や争論を避けて穏やかに生活でき、自身の研究にも役立つと三中は考えていました。幕末の城下町土浦に暮らした三中が何に関心を持ち、どのような考えでいたのか、その足跡をたどることができるのが本書の大きな特徴です。
(木塚久仁子)



「野中廻清水」（茨城県指定文化財 当館所蔵）

1/28（土）11時・14時からこのページで紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください

- 『家事志』第一巻～第六巻（2階展示ホール図書コーナー）
- 色川三中肖像（茨城県指定文化財 当館所蔵）



まつしょう

土浦館と松庄旅館

ふすま

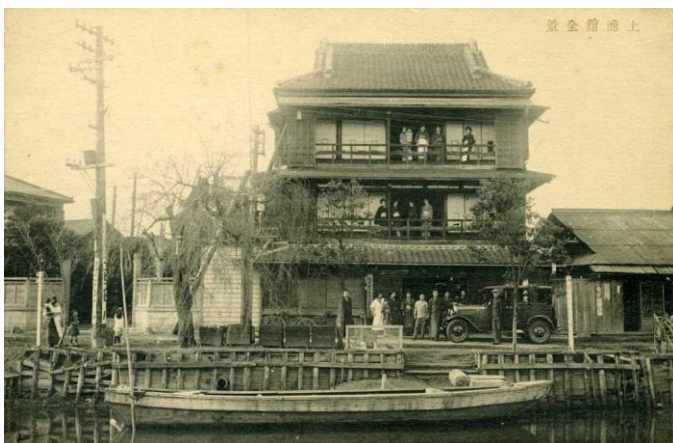
— 絵葉書と襖の下張り —

物資の集散地や水戸街道の宿場として水陸交通の要衝であった土浦において、特徴的な存在のひとつが旅館です。昭和 25(1950)年に作成された「市制十周年記念 大土浦市精密図」でも、土浦駅と荒川沖駅周辺だけで 30 軒ほどを確認することができます。今回はかつて川口川沿いにあった 2 軒の旅館に関わる資料をご紹介します。

写真①は土浦館の絵葉書の一葉です。土浦館は川口町（現川口一丁目）の八千代橋付近（現在のモール 505 駐車場付近）にありました。本館と別棟が被写体となった絵葉書は、広告宣伝を兼ねて製作されたようです。「曾祖父の代までは『三味線屋』という船宿でした。後の明治 28（1895）年頃曾祖母が場所を移し、当時としては珍しい木造 3 階建ての建物にしました。写真の 3 階には女中さんに抱かれた自分が写っています。映画撮影の方々が宿泊したことを父母によく聞かされました」（染谷愛子さん 昭和 8 年生まれ 平成 27 年度聞き取り調査より）。戦中は旅館業をやめ「土浦学寮」として東京からの疎開児童およそ 200 名を受け入れた時期もあった土浦館の、風情ある佇まいを知ることができる絵葉書です。

写真②は松庄旅館の宿帳の一部です。旅館は本町（現中央一丁目）の桜橋のたもと（現在の三菱東京 UFJ 銀行付近）にあり、かつては土浦館と同じく船宿を営んでいました。近年関係者の方から、宿帳を下張りにした襖を保管しているという情報を得、当館で解体作業を行いました。宿帳には名前・年齢・職業・住所・行き先などが記され、とくに職業欄の「桑苗商」「蚕種商」「糸繭商」が注目されます。土浦と養蚕の関わりについては「霞」10号と36号でご紹介していますが、土浦は関東一の繭の集散地で、養蚕業は欠かすことができない産業でした。宿帳の記載からは、カイコが食べる桑・カイコの卵・カイコの糸繭を扱う人々が土浦を中心として活動していたことをうかがい知ることができます。

それぞれ旅館の営みを示す断片ではありますが、往時の町の姿を復元するための糸口になるものといえます。（野田礼子）



写真① 絵葉書「土浦館全景」（当館所蔵）

写真② 松庄旅館の宿帳（部分）（個人所蔵）

2 / 4（土）11時・14時からこのページで紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください（いずれも近代コーナーに展示）

- 丸万旅館の看板（当館所蔵）
- 桜井旅館の印半纏（当館所蔵）
- 市制十周年記念 大土浦市精密図〔メッセージパネル〕



市史編さんだより

駒ヶ滝の由来

駒ヶ滝は土浦市東城寺地区の一画にあります。駒ヶ滝の名前の由来については『土浦市史民俗調査報告書 第一集 山ノ荘の民俗・日枝神社の流鏝馬祭』に、流鏝馬祭で重要な役所である市川将監と小神野弥平が滝で潔斎をして、馬の訓練をした時の蹄鉄の跡が残ることから名付けられたとあります。

平成27年度に刊行した『土浦関係中世史料 上巻』の『沙石集』の「学生の間世の事無沙汰なる事」に東城寺の高僧・円幸上人についての記述があります。それは円幸上人が馬に糞をつけて田に運ぶところを見て、そのような事に意味はない、経を唱えることこそが田を潤すのであると試みてみたり、臼を上と下に置き杵一つでついたら効率がよいと言うなど、世情への疎さが目立つところでその記述は終わっています。

市史編さん係では、様々な歴史史料を読み進めています。享保8（1723）年、靈天という僧が記述した「東城寺来由記」という史料の中に駒ヶ滝に関する記述があることがわかりました。それは『沙石集』の後日談とも言えるもので、円幸上人の話を中心に駒ヶ滝の名の由来が書かれています。今回はこの史料による駒ヶ滝の由来をご紹介します。

「東城寺来由記」の記述では、円幸上人については、具体的に法橋（僧位の一つ。法印、法眼の次に位する）とあり、かなりの高僧であることがわかります。その円幸上人が、小沙弥（少年僧）が田を耕しているところへ出くわし『沙石集』と同様に、経を唱えていれば馬で田を耕さなくてよいのだと説きます。これに対し、そのような考えは偏っていると皆に言われて反省し、田のことには口出ししないことにします。この小沙弥は朝な夕な自分の馬を大切に育てていましたが、実は齋料（法会や仏事の際、僧への食事やそれにあてる金品）を盗んで馬に与え飼料にしていたのでした。ある日、そのことが発覚し円幸上人に厳しく咎められます。小沙弥は言い訳する事もなくその夜のうちに寺を抜け出し、滝に身を投げてしまいます。そして育ててもらった恩を忘れない馬も小沙弥の後を追って同じようにして死んでしまうのです。円幸上人は大きな衝撃を受け歎き苦しみ、そしてこのことが上人を激しい仏道修行へと向かわせていきます。自分へ課した激しい修行を経て、やがて円幸上人は入寂の時を迎えます。その夜、寺僧の夢の中に穏やかな表情の円幸上人が現れ、別れを告げ、馬を連れて小沙弥と西天へ向かって行きます。目を覚ました寺僧が滝へ行ってみると、そこには新しい蹄の後が残っており、それ以来駒ヶ滝と呼ばれるようになったと締めくくられています。

この史料を記した靈天は、東城寺や同じく新治地区の神宮寺、永国の大聖寺の住職も歴任し、雨乞いの祈禱でも当時有名だったようです。この頃の東城寺には円幸上人の住まいだった東光院や入定塚が残されていたとあり、もしかするとそこからインスピレーションを得たのかもしれませんが。

駒ヶ滝の由来を一つの物語として考察してみると作者・靈天の人柄の一端もみえてきます。何の言い訳もせず小沙弥が死を選んだことが、円幸上人が受ける衝撃の大きさや後悔の念をより強く読み手に印象づけ、修行を通して、大きな苦しみを抜けた先には幸福の境地へ、小沙弥と馬と共に彼岸へ渡って行く清々しい姿を想像させています。昔話における急な場面転換や仏教的な教えをちりばめながらドラマティックに物語を展開させている点は、円幸上人とは対照的に、靈天上人は人情の機微を理解し、なかなか世情に通じた僧であったことが読み取れるように思います。

（市史編さん係非常勤職員 矢花洋恵）

地域と博物館

博物館の役割（１） ～資料の収集・保存～

「博物館法」によると、「博物館とは、資料を収集し、保管し、展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、あわせて資料に関する調査研究をすることを目的とする機関」と定義されています。この定義から、博物館には収集、保管（保存）、展示、教育、調査、研究などのさまざまな役割があることがわかります。前回の展示室だよりでは、これらを「四つの役割」にまとめ、①収集保存→②調査研究→③展示公開→④教育普及というサイクルを博物館の理想的な活動として提示しました。

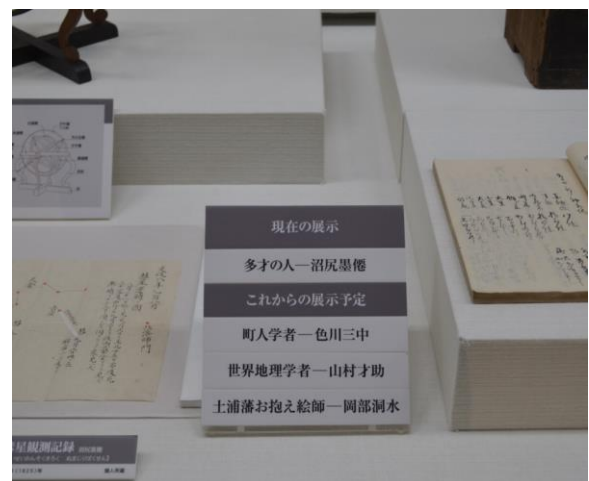
展示室だより「霞」31号で、資料の収集保存から教育普及へのサイクルがくり返し実施され、博物館活動が継続されることを「地域文化の好循環」と評価し、地域資料の収集保存がより効果的に、有意義に推進されることを期待しました。個人的には、博物館の最も優先すべき役割は、この資料の収集保存にあると考えています。

資料の収集は、それぞれの博物館が独自に、計画的に行うべきと考えます。とくに、小規模な地域博物館においては、限られた収蔵スペースにどのような資料を重点的に収集するのか、地域の歴史や民俗、地理や自然環境の特性を勘案して、資料収集方針を策定する必要があります。当館では、土浦地域の古文書資料の収集、散逸した土浦藩関係資料の収集、年中行事や伝統行事、伝統技術など無形文化財の映像記録の収集などを意識的に続けてきました。近年では、第二次世界大戦後70年を機に、消え失せつつある市民の「戦争の記憶」の収集を行っています。

収集した資料の保存のためには、管理の行き届いた収蔵庫が不可欠です。とくに環境の影響を受けやすい資料については、温湿度を一定に保つことができる恒温恒湿の収蔵庫や、調湿環境を整備した収蔵空間が必要です。このように、博物館には資料保存に対する十分な配慮が必要で、それは収蔵庫や展示室などの施設や設備だけではありません。調査研究や展示公開、教育普及などの博物館が果たすべき役割のすべてにおいて、博物館に集められた資料の保存を大前提に取り組む必要があります。（塩谷修）



収集した古文書資料
（古文書を袋詰めし、箱に収納した文書収蔵庫）



展示替えの表示プレート
（資料保存のため、定期的に展示替えします）

「霞短信」コーナーでは、博物館活動に関わる方々の声やサークル活動の記録などをお伝えしております。

今号は、土浦市中央一丁目地区長の佐藤陽一さんに寄稿していただきました。

旧中城町の山車人形と謎の記録紙

平成28年、恒例の八坂神社の祇園祭が近づく頃、修復された旧中城町（現中央一丁目）の山車人形の頭が市立博物館で9月中展示される事が伝えられました。

今から22年前の平成6年7月2日の夜、蒸し暑い中央一丁目公民館の座敷、お祭り好きで町内でも選りすぐりの青年会の面々が集まってきました。酒を酌み交わす座の前には、代々受け継いできた山車人形があり、旧中城町の山車と共に博物館へ寄贈することに決めました。人形は100年以上にわたり使用されてきたため、顔も衣装も傷みがとても激しいのです。

話に花が咲き気分が高まるうち、頭の化粧直しをしようという事になっていました。そこは素人、若さと酒の勢いで手を加えました。誰の発案か、この化粧直しの記録を書き留めておく事になり、あり合わせのカレンダーが写る素敵な紙の裏に書きました。この記録紙を頭の中へ入れておいたのです。

今回の修復事業で、頭内部から江戸最期の人形師・古川長延の貼り紙と共に出てきたのがこの記録紙で、忘れかけた若いころの懐かしい記憶が思い起こされました。明治から受け継がれてきた山車人形は学芸員さんの解説通りの素晴らしいものです。この始末はいささか悪戯すぎたかな？ 今回修復がなされた頭たち（源三位頼政公・猪俣太）は本来の姿で輝き、生き生きとして今にも動き出しそうです。出来る事なら、博物館だけでなく中央一丁目（旧中城町・旧内西町）ゆかりの地で町内の皆さんにも見て頂きたいと思います。

ちなみに先の記録紙には、「平成6年7月2日 中央一丁目、監修・竹中実、人形師・三代目（故）上野正雄、目玉師・三代目丸木屋佐藤陽一、のり師・佐賀潮、立会人・矢口成也、小野慶一、染谷誠、竹中紀博、桜井卓、西谷亨、伊藤央雄、中村剛之、菊地昭芳、寺本光男」と記されています。（佐藤陽一）

コラム (37) 「大畑のからかさ万灯」DVD

からかさ万灯は、市内の大畑地区にある鷲神社境内で毎年8月15日の夜に開催される伝統的な仕掛け花火です。雨乞いばやしの演奏を合図に、点火された綱火が音を立てて走り、直径5mの大きな唐傘から滝のような花火の雨が降り落ちます。いつもは静かな神社境内が多くの見物客でにぎわい、農村花火の伝統を伝えています。

この花火は、国選択及び茨城県指定無形民俗文化財となっており、大畑からかさ万灯保存会の方々により传承されています。昨年度、文化庁企画により記録映像制作が行われました。その内容は、短編の普及編（38分）と長編の記録編（60分）からなります。後者では、からかさ万灯の製作から花火点火までの全過程が克明に描かれ、演奏されるおはやしなども詳細に記録されています。

いずれも博物館2階の展示ホールに設置された情報ライブラリーコーナーで鑑賞することができます。（関口満）

情報ライブラリー更新状況

【2017・1・5現在の登録数】

古写真 572点(+5)
絵葉書 484点(+5)

※（ ）内は2016年10月1日時点との比較です。展示ホールの情報ライブラリーコーナーでは画像資料・歴史情報を順次追加・更新しております。1ページでご紹介した古写真・絵葉書もご覧いただけます。

霞（かすみ） 2016年度
冬季展示室だより（通巻第37号）

編集・発行 土浦市立博物館
茨城県土浦市中央1-15-18
TEL 029-824-2928
FAX 029-824-9423
<http://www.city.tsuchiura.lg.jp/section.php?code=43>

1～5ページのタイトルバック（背景）は、博物館2階庭園展示です。

2016年度冬季展示は、2017年1月5日（木）～3月12日（日）となります。「霞」2017年度春季展示室だより（通巻第38号）は2017年5月13日（土）発行予定です。次回のご来館もお待ちいたしております。

※展示室だより「霞」は、当館ホームページからもご覧になれます。（カラー）